

民話 ゆうわ座
— 話に遊び 輪を結び 座に集う —

いまここにも開いている昔話の入り口

「かちかちやま」のいろいろな顔

かちかちやま (例話)

「むじなの話」 (仙台市)

「太郎と兎」 (高清水町)

「かちかち山」 (蔵王町)

「かちかち山」 (宮城町)

むじなの話

ざっとむかし、ほれ、あつところになれ。

山の中にじん(種)つあん(妻)とばん(妻)つあん、二人で暮らしたんだとなれ。

じんつあん、畑、いっしょけんめいになって稼かせいでつたとなれ。種、

いっしょうけんめなつてまいてつたところ、むじな来て、ちよこんと

切り株さ、腰かけたんだと。

そしたところが、じんつあんが、

一粒ひとつぶまいて 千せんになれ

二粒ふたつぶまいて 二千ふせんになれ

つて、いっしょうけんめに種まきしたつげが、むじなの野郎、

一粒ひとつぶまいて くっされる

二粒まいて くっされろ

って、うたつたんだと。じんつあん、

「この畜生！」

って、追つかけたところが、その時は逃げてって、また、じんつあんが、

一粒まいて 千になれ

二粒まいて 二千になれ

って、いっしょうけんめにまいていると、ちよこんと目の前さま来て、

一粒まいて くっされろ

二粒まいて くっされろ

って言わつたんだと。

じんつあん、ごせつばらやけてなれ、鉄さふりあげでそのむじな、

追って捕つたんだとや。

そして、そのむじな、棒杭さつけて家さかついで来て、

「ばばや、ばばや、今日なれ、むじな捕ってきたから、晩げにむじな

汁すろや」

となつたと。ほんで、

「じんつあん、むじな捕ってきたのすか」

「ここさ吊るしておくからな。晩げ、むじな汁すろや」

って言わつたって。

そのむじな吊るさげてから、じんつあん、昼間つからまた畑さ行つたんだとや。

そしたところが、ばんつあん、川さ洗濯に行くべやと思つたつけ、

「ばんつあん、ばんつあん、おれば解いてけさいん。解いてけらつた

ら、なんでもしてけつから。ばんつあん、これから悪いこともなんに

もしないから、ばんつあん、ここさ吊るさげてたの、解いてけさい」

って、言つたんだと。

ばんつあん、

「ほんなこととして、じんつあんにごつしやがれつからだめだ」

と言つたところが、

「ほんでねえから、じんつあん来るまでに、おれ、またここさぶらさ

がつてるから、とってけさいや」

って言つたんだと。

「んで、またなあ」

って、ばんつあん、とってほれ、なにしてもらうべとしたところ、ほ

のむじな、ぼくた(丸太)たんがえて、ばんつあん、ぶんなぐつて殺し

たんだと。

そして殺しては、むじな、ばんつあんに化けて、むじな汁こしやえ

るとて、いっしょうけんめにばんつあんの肉とって、鍋さどつさりと

こつしやえつたんだと。

ほしたつけ、じんつあん晩方、帰つてきて、

「ああ、じんつあん、むじな汁こしやえつたから、食べて食べて」

って、言われて食つたところ、そのむじな、

ほら、ばば食ったべー

ばば 食ったべー

って、逃げていったんだとや。

じんつあん、ほの、むじなに逃げてかれて、

「われ食ったのは、ばんつあんかや」

とって、おいおい泣いたんだとやわ。

おはなし、こんでおわり。

(仙台市 相沢みつえ)

太郎と兎

むかしむかし、あるところに、庄屋さんがあって、そこで屋根がえをする事になったんだと。

そこで、ある家からは兎と猪が、

「今日は庄屋で屋根がえだから、兎どの猪どの、手伝いに行つてこい」と言われ、庄屋さんのうちにやつて来たんだと。

行くときつそく、旦那どのから、

「兎どの猪どののは、むかいの山から茅しよいしてきてくれ
つてたのまれたんだって。

「はい」

つて、縄でなつた綱をもってむかいの山に行つて、茅をしょつてきた

んだと。

そしたら、途中で、兎が猪を前にたてて、猪のしよつてゐる茅にガツサリと上がったんだと。

猪が、

「なんだや。あのガツサリつつう音は」

つて言つたれば、兎が、

「ガツサリ山のガツサリ鳥ですべ」

つて言つたんだと。

そして来るうちに、こんどは、カッチンカッチンと音がしたつつうんだ。

「何だべ、あのカッチンカッチンて音は」

つて、猪が言つたれば、兎、

「カッチンカッチン山のカッチン鳥ですべ」

つて言つたんだと。

したら、こんどは、ポウポウという音がしてきたつていうんだ。

「なんだべ。あのポウポウという音は」

「ああ、そいつはポウポウ山のポウポウ鳥ですべ」

つて言うが早いから、兎はするつとびおりて、蓼畑さかくれたつていうんだ。

猪は背中が焼けるようにあつてもんだから、しよつてゐる茅おろしてね。そんでも、やけどはするし、茅もぜんぶもえてしまったと。

「なんだ、兎いないから兎のしわざだな。さてはここらにかくれてんじゃないか」

つて蓼畑たきさがしてみたつけ、兎めつけだと。

「なんだ、おめえ、おれの背中さ火つけたんでねえが」

「なに語る！おれは蓼畑たきの兎で、そんなことをしたのは別な兎ですべ」
つて、そうしているうちに、兎が竹たけやぶさ逃げたつていうんだ。竹やぶさがしてみたつけ、兎めつけたつていうんだ。

「なーんだ、兎や、竹やぶさ来て。ま（な）やつてけろ、おれの背中のやけど」

「なーに、おれは知らないな、おれは竹たけやぶの兎だ。だが、少しぐらいのやけどだったら笹の葉かんでつけつとなおるんだ。ところで猪ししどのや、おれは、今日魚取りに行くべと思つてた」

猪ししは、魚とりが好きなもんだから痛いのもわすれて、

「んで、兎どん、おれもつれてつてあべつちや」

つてたのんだんだとね。

「あんたにか（騙）かられつからやんだ」

「いや、いいから、つれてあべ」

「んだったら」

つて、いっしょにまず浜辺まで出て、猪ししは土の舟ふねさせて、自分は木の舟ふねに乗つたつんだね。

そうして、少しこぐうちに、土でつくつた舟ふねはくずれてしまつて、

猪ししはぶくぶくと沈んでしまつたつていうんだ。兎は、

「ああ、こりゃいい」

と思つて、死んだ猪ししをひつかついできて、どこかで料理して食べようと思つて、ある一軒の家いへ来たんだと。

「やあ、太郎や太郎。猪ししとつてきた。猪汁ししじゆ食かせつから、鍋かまかせ」

「ああ、今日は父ちちも母ははもいねので、帰かへつてくつとおこられつからわかりえん」

「なーに、太郎にも食かせつからやあ」

「食かせつこつて、んだったら」

つて、太郎は釜鍋かま出してやつたんだと。

兎は猪ししの頭かぶとつて、玄関げんの庭にわ先まへさつるして、太郎の父ちちと母はは来たら、くつつけつとこしてたんだと。

それから、兎と太郎とで猪しし煮にて食かつては、お昼ひるもちかくなつたんで、

「んで行くから」

つて、兎、うしろの山やまさ帰かへつていつたんだと。

お昼ひるになつて、父ちちと母ははが畑はたけからあがつて来て、家いへに入るべつてしたら、猪ししにばつくり咬かみつがれたつんだね。

「なーんだ、太郎や太郎。何なにしたんだ」

「んー、これこれこついうわけで兎う来て、猪料理ししりして食かうから釜鍋かまかせつつうから、父ちちも母ははもいねがらわがねつて言いつたんだけども、しゃにむにかせつて言いうから、かしたんだ」

って言ったと。

「その兎、どこさ行ったんだ」

「うしろの山さ行って寝てたかわかんねえ」

「んで、おれ行ってみっから」

って、太郎のおやじがうしろの山さ行ってみれば、あんのじよう、昼寝してたつうんだ。うまいもの腹いっぱい食ったからは。

そこさ行って、兎、おさえつけだつうんだ。

「太郎や太郎。鉈持ってこい。」

って言ったれば、太郎は杓子持ってきたつうんだ。

「なんだべ、鉈持ってこいつて言ったのに、杓子持ってきた」

って言ったれば、こんどは、太郎、すりこぎ持ってきたつうんだ。

「なんだべ。鉈持ってこいつて言ったのにすりこぎ持ってきた。ほだ

らば太郎、おさえてろ。おら行って鉈持ってくつから」

って、父、行ったと。

太郎が兎んところ、おさえてたれば、

「太郎、太郎。お父さんの頭、なんぼおつきい」

って兎が聞くんだと。

「んー、頭か。頭だらこんなもんだべな」

って、片手でおさえて、片手で手づもりしたつて。

「なんだつけ。太郎や、片手でわがんねっちゃや。両手で手づもりし

てみせろ」

って言ったんだと。

「ほんで、このくらいか」

って、手をちよつとはなしたすきに、兎はぼんぼこ、ぼんぼこ逃げはじめた。

ちようどそこさ、太郎のおやじが鉈持ってきたつうんだね。駆けつけて、

「なんだつけ、太郎はなしてしまつて」

って、兎さ鉈ぶつけたつうんだ。

したら、かんじんな所さは当だんねで、しっぽさ当たつたつうんだ。それで、それ、兎のしっぽは短いんだと。

よんつごもんつごさげた。

(栗原郡高清水町 武川悦二)

かちかち山^{やま}

むかし。

おじいさんとおばあさんが二人暮らししたわけっしや。ある日、おじいさんが柴^{しば}かりにいつて、おばあさんが庭掃^はぎしたんだつて。

そしたら、豆、十^とつぶばりひろつたんだつて。そこさ、おじいさんがかえつてきたからつて、そのごと言つたつて。

「豆^と十つぶばり見つけだあ」

「あー、ほんでは、ほいずまいで、来年、いっぺ豆とって、あげもしたり、いろいろ使い道しつかりして食うべ」

おじいさんが豆まきはじまったわけさ。

「一つぶうえれば 千つぶになれ」

「二つぶうえたら 二千つぶになれ」

って言いながら、豆まきしつたど。ほしたらその畑のよせに大きな石があつてね、そこにむじなが出てきて、ひよっこりあがつて、

「じじ豆くされろ」

「じじ豆くされろ」

って、悪口言うんだって。おじいさん、ごしえはらやげるがらって、

「このちくしょう」

「つてぶぐつてやつと、まだ豆まきはじまった。」

すると、まだ来て、

「じじ豆くされろ」

って言う。なんべんぶぐつてもだめなんだな。

これをとってやろうと思つて、こんだあ家さもどつてきて、

「ばあさん、ばあさん」

「なんだ」

「もち 三升ばりついでけろや」

「なにすんのや」

「やー、あのむじなのやづ、おれさ、悪口言つてしやねがら、とっか

ら」

「いがつべな」

どつて、たちまぢついだんだと。三升もちもつて、おじいさん、その

石さべだーつとおいで、しやんぶりして、まだ、

「一つぶうえれば千つぶになれ」

と言いながら、うえつたのしや。ほしたらまだ、むじなが出でて、

どつこいど腰かけで、悪口言うんだと。

「このちくしょう」

こんどは、むじなの股ねつばつてわがんねがら、なわぐるぐるぐる

まいでね、とつつかめえたのさ。家さ来て、なわでしばつて、縁側さ

ぶらさげでね、

「おれ、町さ、とうふ買いさ行つてくるから。ばあさん、米ついでい

ろな」

と言つて、町さ行つたんだと。

おばあさんが庭で米つきはじまったんだと。晩げ、食うぶんだげ。

そしたらば、そごにぶらさがつていたむじながね、口きいだつたんだ

ね。

「ばあさん。おれついで助けつから、なわといでけろ」

「やんだ、おら。おじいさんに、おん出されつから」

「しや、おれ、じいさん来たたら、まだ、ごごぶらさがつてつから」

そいうぐ言つているうちに、とうとう、おばあさん、負けでね。む

じな、まず、おばあさんの杵とついでついででけだんだど。

ほしたら、わざとなんだか、ぎぐら、ぎぐら、こぼしてしようがねんだね。

「あー、なんでこだにこぼすんだ」

どつて、こごまっているうちに、杵で頭はだいでね、おばあさんば殺したんだつけど。そして、しゃんぷりしてね、こんどは、わらわらおばあさんの着物をはいで、わが着ておばあさんになりすまして、そして、おばあさんの肉、どごがらがとつて、なべさ、煮でいだんだど。

おじいさんがもどつて来たらばね、

「おじいさん、あのむじな、煮だがらわ」

つて言った。

「あーそうが。ほだらば、よごしてみろや」

どつて、わけでやったつんだね。したら、

「なんだ、ばば臭えな」

どつて、そしてるうちに、だんだんにわがらつて、むじな、悪口言いながらね、

じじ、ばば食った

やーい、やい

つてその山さ^{やま}にげでつたつんだな。おじいさん、くやしがつてね。玄関先^{げんかん}で泣いだつんだな。

そこさね、うさぎどんが来てね、

「なに、ずん^{ずん}つあん、なんで泣いでいるんだや」

つて言ったら、

「あー。おらあむじなに馬鹿^{ばか}にさつてね。ばば殺さつて、その肉まで食せらつたわ」

つて言うわけ。

「ほーが、ほんでは、ずんつあん泣くなや。おれ敵^{かたみ}とつてけつから」

「あー」

「ほんだらや、町^{まち}から手ぬぐい、白に赤に浅黄^{あさぎ}の三種類の手ぬぐい、買つてけるや」

「うん」

そしてまあ、買つてきて、うさぎどんにたのんだ。

そして、うさぎどんは、白い手ぬぐいをもつて山^{やま}行つたんだつて。

そしたら、むじなが冬^{ふゆ}ごもりの小屋をなおすために、茅^やかりしつたんだつて。ガリリガリリつて。

「なにすつたや」

つつたら、

「やー、茅^やかりだわや。雪ふつかんな」

「あ、ほんだら、おれ、かつて助けつかや」

「うんだな。助けられたつたら、ほれもいいなあ」

つてなつて、まあ、かつたんだな。そしてるうちに、うさぎどんがね、

「あ、痛々^で」

ってなつたつんだな。

「なんだ」

ついたら、

「茅ほつ葉はさしたわや。なにがあるがわがんねわや」

「ほんだら、おれ、茅ほしよつた上かみさ、おめちよこつとあがつていったらいがべ」

「そうが、そうしてけらいや」

つて、茅ほしよつた上かみさ、うさぎどん、ひよつとあがつていった。そのついでに、マツチですつたんだつんだな。昔のマツチ、石いしど金かねだおね。ほんだがら、カチカチするわけつしや。

「カチカチつていうのは、あいづなんだや。あの音ねや」

「あいづ、山のカチカチ鳥とりだべ」

つて言うごどで、ほういうごどするうちに茅ほさ火ひついでしまった。

むじな、にげだつんだな、山やまさ。背せ中で、茅ほもえでるんだがら、背せ中ちゆうを大おほやけどしたわけ。はねればはねるほどもえつからね。

むじなは、大おほやけどして、家いえさ行いつて、寝ねこんだわけや。

うさぎどん、赤あかい手てぬぐいかぶつてよ、

「まあ、これあ死しんだべな」

とおもつて行いつてみだら、うなり声こゑだけして生きでいだづんだな。

それで、うさぎどんはね、

「こんだあ、なじよにしたら、殺ころせつべ」

と、こんどは、火や傷けの薬くすりのふりして、なんばん粉こなをこしえて、売うりさ行いつたんだと。

「火や傷けの薬くすり。火や傷けの薬くすり」

つて、ふれながらね。ほしたらね、火や傷けの薬くすりだがらね、むじなのやつ、ほしくてしゃねえわけ。

「ま、そいづ売うれや」

ど、なつて、買かうべとおもつたら、ほれ、こないだのうさぎどんなものがら、

「こないだ、火やつけであおいだの、おめでねが」

「おれでね。手てぬぐい見みろや」

どつて、赤あかい手てぬぐいかぶつたわけや。そこでまず、なつとくして、そして、むじなが、その火や傷けの薬くすりつけた。なんばん粉こななもんだがら、痛いたくでしゃねんだ。

「なんじゃ、痛いたくて、痛いたくて」

つて、むじな、あばれだんだと。

「こんどこそ、このやろう」

つて、うさぎどんは、しあきつて行いつたらば、まだ生きでだんだと。

こんどは、うさぎどんはね、浅あ黄わうの手てぬぐいかぶつて、舟ふねづくりしてだんだつて。

ほんこら ほんこら

つてね。そごへ、なおつたむじな、あそびさ行いつたつんだな。

「なにすったや。うさぎどん」
つつたつけ、

「あーん、おれこの舟つくって、海さ行って魚とるんだや」

「おめ、このまえ、おれのどご…」

と、やつぱり、こないだのごどで、きがれだんだど。うさぎどん、手ぬぐい見せて、まだ馬鹿にして、のがれたんだど。むじな、

「おれにも、その舟こしえてけねがや」

つつたんだどや。

「うーん…いがんべな。おめんなは、木でなく土でこしえてけつから、粘土しよえや」

って、粘土もって来させて、粘土舟こしえてけだど。ほうして、できあがったがら、土の舟と木の舟どいっしょにこぎだしたつつんだな。

うさぎ舟　ズイー　ズイー

むじな舟　ズブ　ズブ

どって、行ったんだどや。

それをなんべんもくりかえしているうちに、その土の舟、われでしまったおん。サザツとわれだがら、その海さ、ドサーンとおって、むじな、命おどしたわけ。うさぎどん、よろこんで来て、おじいさんさおしえだんだど。

「敵、とつたがんな」

かちかち山

じいさまとばあさまがいたたどさ。じいさまとばあさまは、うんと働ぎ好きの人だつたど。

じいさまは、畑さ麦蒔ぎに行つて、ばあさまは家にいで麦搗ぎしたど。

じいさまが畑をうなつて麦を蒔いだどごろ、藪このかげで音したつたど。じいさまは、

一粒蒔いたら　千になれ

二粒蒔いたら　二千になれ

って念願して蒔いたど。ほうしたら、藪このかげで、

一粒蒔いても　くされろ

二粒蒔いても　くされろ

って言つてるものがいだつたど。

「何だべな。不思議な音するもんだ」

つてよつく見たらば、狸の野郎め、大きな石さ腰かげで語つてるんだと。

「ちきしょうめ」

つて思つていたが、日も暮れぐれになつたので帰つてきたど。

「やあ、ばあさまや。麦蒔ぎしたどごろが、狸の野郎来て、おれ、

「一粒蒔いだら千になれって言ったたら、一粒蒔いでもくされろってぬがしゃがった」

こういうふうには、ばあさまとごはん食いなながら語ったと。

「困ったなあ。いじわる狸だなあ。じいさま」
って、こうなつた。

「あの狸の畜生、いづがせいほうしてけねくてね」
ど、いろいろ考えだ。

「よし、いつもあつこの石さま来て尻ついでけづがつかから、あの石さま鳥糞ねっばしておいで、とつちめでけんべ」
ど思った。

そうして、次の日、今度はその石さま、べだつと鳥糞ねっばして、まだ麦蒔ぎば、はじまつた。

そうしたら、狸の畜生来て、石に腰かけて、
くされろ くされろ
って語った。

「この野郎、よくそんなことぬがしゃがって」
って歎振る回して行つた。ところが、べつたり尻さ粘つてつから、
生げ捕りにした。

そいづ殺して家つあ持つて行けばいいごどだげんとも、じいさま、功名すつべど思つて、足ど手つこ結つて、歎、つっ通して、家つあ担いでいつた。そして、

「ばあさまや、とうとう、おれ、とつちめできた。この畜生めだ」
と。そして、梁んどごさつるして、夜を明がした。

次の日になると、じいさまは、まだ、麦蒔ぎに行つた。ばあさまは家において、麦蒔ぎはじまつた。

ほうしたら、狸の野郎、ばあさんに言つた。

「ばあさま、ばあさま、ひどがんべ」
って。ばあさまは、

「なんだ。狸の野郎、口たつたのが」
って、まだ、麦蒔ぎした。狸は、

「ばあさま、ひどかんべ。おれ、麦蒔ぎ手伝えすつから」
って言つた。

したら、ばあさまも、麦蒔ぎすんのひどいから、つるしつたやづ降ろして、手ど足しばつたやづといで、

「うんだら、お前、搦いでみろ」
って言つた。

狸は、一生懸命搦いだ。(最初のほう) さきまり一生懸命麦蒔いだげんとも、だんだんに時間がたつにしたがつて、狸の野郎、今度あこぼして仕様ねがつた。

ばあさまは、

「せつかくじいさまが難儀してとつた麦、一粒でももつたいねえ」
つっわけで、臼のぐるり、拾つた。ところが、その隙を見て、狸、

ばあさまを一撃で殺しちまつた。

そうして、じいさまが畑から帰ってくるまで、ちゃんとはあさまに化けて、お夜食の御馳走出した。

「じいさま、狸汁、うまがんべ」
って。

「旨には旨げんとも、何だか、ばば臭えな」
って食べた。

そして、ごはん食べあげると、ばあさまは、炊事場さ行って茶碗だの洗って、裏の出入口がらじいさまいだどごさ聞こえるように大きな声で、

「婆食って旨かったべ。婆食って旨かったべ」
って言った。

ほうしたら、じいさまがたいそう悲しんで、めくめく泣いたどごさ兎の野郎来たと。

「何して、じいさん泣いたんだ」
って聞かれたんで、じいさま、

「こうゆうわけで、麦蒔ぎさ行っておさえできた狸が、ばあさまば殺して、おれさ煮で食わせたんだ。ほんで、悲しいがら泣いたんだ」
って語った。

「そうが。うんだったらいい。おれ、敵とってけつから。泣ぐのやめせ」
ってなぐさめだ。

そうして、さつそぐ、兎、狸の家つあ行った。

「やあ、狸どのや。おれ、屋根葺きしなげねえがら、茅背負って助けねが。今からでもいいがらやあ、手伝ってけろや」

「ほうだなあ。兎どの屋根葺きすんで、まず、手伝えしねわけにいがね。ほんだら、行って、背負って助けつから」

って茅背負いを手伝った。

そうして、

「このへんでよがろう」

と思う時分に、兎野郎、後にいで、火打石、カチャカチャして鳴らした。

「やあ兎どの。今、カチツカチツて言ったのなんだや」

「あいづ、カチカチ山だや」

兎は、火いつかねから、までも、カチツカチツて鳴らした。

「なんだや。ずいぶんカチツカチツつ音すんなや」

「カチカチ山だもん。カチカチつて音すつぺつちやや」
って。

そうしているうちに、今度あ、背負った茅さとうどう火いついた。

はあー、今度あ狸の野郎の茅背負ってだの、降ろすに降ろさんね。

ほうほうと火い燃えて、背中、まるつきり火傷なつてしまった。

狸、家つあ帰って、うんやらうんやらうなつて寝った。兎、

「なんだ、まずや。なにしまった」

って狸の家さ行った。

「茅運び手伝えに行つて火事にあつて、火傷にあつたおんや」

「ああ、ほうか。ひどがんべ。今、火傷の薬持つてきてけつから、つけてみろ」

兎野郎は、今度、家つあ駆け込んで行つて、南蛮味噌を作つてきた。

「こいづ、火傷の妙薬だから、つけてみろ」

と言うと、狸が、

「つけでけろ」

つて言うので、背中さへらで、べつたと南蛮味噌塗たくつてやつたど。

ほうしたら、塩っぺえのばんでもひどいのさ、南蛮入つた味噌だから、うんとくるしんだと。

そうして、幾日も幾日もすぎてるうちに、どうやらこうやらその火傷もなおつたど。

まだ兎野郎遊びさ行つて、

「魚捕つさ行くべつちやや」

「魚捕つさ行くべつたつて、舟はねえしなや」

「舟などこせんの、簡単だや。おれ、こせえでけつから」

兎野郎、自分の乗る舟、木で作つた。そうして、狸の乗る舟、土で作つた。

そうして、出来上がったので、いよいよ今度あ、魚捕りどゆうごどになつて、出がげだど。

沖さ出んべと思つて、兎野郎、うた歌つた。

うーさぎ舟 チン

たぬき舟 スブズブー

こいふに歌つたど。

「なんだや、縁起悪いごど語るなや」

狸にこう言われても、また、

うーさぎ舟 チン

たぬき舟 ブクブクー

つて歌つたど。

「なんだつて、貴様や。景気わるいごど語んなや」

そして、狸が、

うーさぎ舟 チン

たぬき舟 チン

つて歌つたんだと。そうしてるうちに、今度あ、だんだんに土とげで、ブクブクーツ

どしずんでしまつたど。兎は、「こん時こそ」と權棒持つて、

「ばあさま殺して煮で食つたの、おほえあつべ。そいづの敵だ」と、狸をぶつ殺したと。

そして、煮で食うべと思つて、狸をお寺さ持つていつたど。

「小僧、狸捕つてきたがら、煮で食うべつちや。和尚様いだがや」

「和尚様、今日、どごさが行つた」

「ちょうどいい。うんで、こいづさっそぐ煮ろや」

って、小僧と二人して狸を煮で食べた。

ほうして、今度あ、兎野郎、満腹になったがら、藪こき行つて寝つたと。ほうしたら、和尚様、どっかの法事から帰つてきて、

「小僧、今来た」

「早いお帰りですね。和尚様」

「なんだ。狸臭えな。狸煮で食つたんでねえが」

「あ、そういえば、兎どの来て、煮で食つて、帰りした」

「なんだ、四足をお寺さ持つてきて、煮で食うとは、不当な奴だ」

「どごさが行つて寝つたがしゃね」

「ほんだら、連で来い」

迎えに行つたげんとも、兎、悪いごどしたと思つてつから、ながなが来がねがった。それで、今度は、小僧と和尚様二人して、しばらくあげてぎりぎり連で来たど。

和尚様、兎を責めて、煮で食うべと思つたんだな。そして、

「小僧、小僧、鉈持つてこい」

つて言うると、小僧、兎ば殺すのはかわいそうだから、へら持つていったんだと。

「なんだ。鉈と言うのに、へら持つてくる馬鹿あつか」

つて言われて、まだ台所さ入つて、次の時にに持つていったと思つたら、杓子持つてつたと。和尚様、

「めんどうな奴だ。わがんねのが。うんだらば、おれ鉈持つてくつから、お前、この兎ば、ぎつちり押さえでろ」

つて、小僧に押さえらせつたど。兎、

「よし、逃げんのは、今時だ」

と思つて、小僧に、

「やあ、小僧どん、小僧どん。和尚様のちよんちよん、どのつ位ある」

つて聞いたど。そしたら、小僧、

「このつ位、ある」

つて、手えはなしたど。

ほん時、兎は、

「さようなら」

つて、タンタンタンタンどはね出したと。そこさ、和尚様来たど。した時、和尚様、鉈袋から鉈出して、ぶつけた。ちょうど、兎の野郎の尾つぽさぶつかつて、尾つぽ、

ぽつ

ともげつまつたど。

うんで、兎の尾つぽは、むがしは長んだつたげつども、今は短んだと。